

## ジル・コロゼ『古代の華』 — パリ案内書を編むこと —

平手友彦

パリはどのように紹介されてきたのだろうか。フランスでは鉄道が整備され、余暇が生まれ、旅行と観光が活発になる十九世紀中頃から旅行案内書が広く読まれるようになる。1851年世界万国博覧会のためにロンドンに赴いたルイ・アシェット Louis Hachette は、駅の書籍販売スタンドを見て、当時広まりつつあった鉄道の駅で書籍を売りさばくことを考えた。早速、北部鉄道と1852年から5年間の専売契約を結ぶ<sup>1)</sup>。1853年には旅行者をターゲットとした「鉄道叢書」Bibliothèque des Chemins de fer の刊行を始めるが、その叢書の一角を占めるのが旅行案内書「Guide des voyageurs」である。「鉄道叢書」そのものは1857年に刊行が止まるが、この叢書に代わってアドルフ・ジョアンヌ Adolphe Joanne 監修の「ギッド・ジョアンヌ」Guides-Joanne が始まる。「ギッド・ジョアンヌ」では「パリ」Paris を扱った案内書は三つのシリーズで刊行された。1854年に始まる「フランスと外国のガイド・ルートマップ」Guides et itinéraires pour la France et l'étranger シリーズの「パリとパリ周辺」Paris et les Environs de Paris、1866年からの小型携帯版「パリ・ダイヤモンド」Paris-Diamant (8.5cm × 14cm)<sup>2)</sup>、1909年の「パリ一週間」Paris en huit jours である(写真1「ギッド・ジョアンヌ」左から「鉄道叢書」の1855年版『パリ・イリュストレ』、1863年版『パリガイド』、1867年版『パリ・ダイヤモンド』、1911年版『パリ一週間』)。中でも「パリ・ダイヤモンド」はほぼ毎年のように改訂されて1913年まで刊行が続き、1919年には「ギッド・ブルー」Guides Bleus となる。

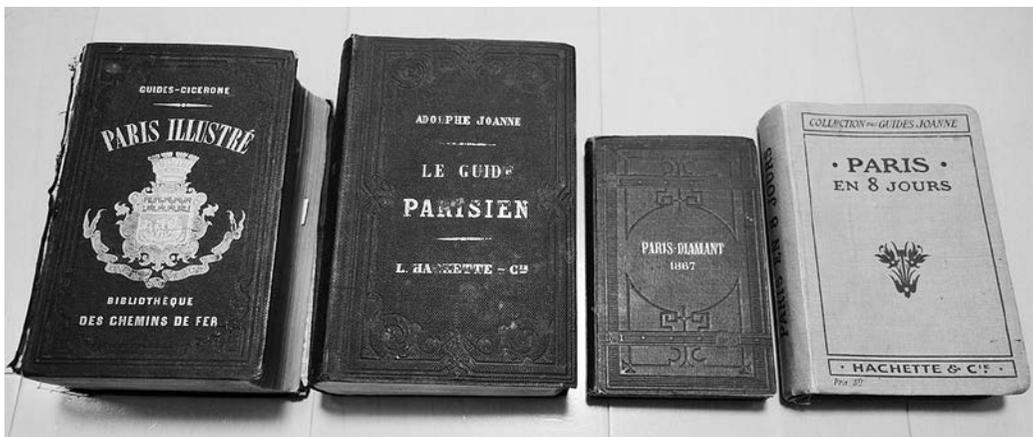


写真1 「ギッド・ジョアンヌ」

旅行案内書では対象とする地域の「記述」を構造化しなければならない。名所、ホテル、レストラン、どこを訪ねるべきか。啓蒙的であって批判的、そして宣伝も必要であろう<sup>3)</sup>。また、記述を補完し、対象とする地域を平面的に見渡す地図は欠かせない。1855年版の『パリ・イリュストレ』*Paris Illustré*<sup>4)</sup>は、パリ到着時に知っておくべきこととして、ホテル、レストラン、カフェとともに公共交通Omnibusなどの情報を冒頭に置く。この後には「パリの説明と建造物」*Description de Paris et de ses monuments*が続くが、その最初は「パリの名の由来」である。ヘクトールの息子フランクス Francus がパリを作り、パリの名はヘレネーを誘惑したパリス Pâris から取られたと長らく信じられてきたが、これは「おとぎ話」*fable* であって、今日ではパリの由来の根拠はカエサルの『ガリア戦記』の中にある「パリジ族」*Parisii* の「リュテシア」*Lutetia* に求めるべきとする<sup>5)</sup>。そして、パリの地誌を四世紀のユリアノス帝のシテ島から始め、1789年の革命を経て「現在」までのパリが語られる。「パリの歴史」が終わると、「パリ散歩」*les promenades de Paris*によるパリ案内、そして「パリの娯楽」、「美術」、「学び」、「行政」、「産業と商業」と続き、裏表紙のポケットには「パリ最新地図」*Nouveau plan de Paris* (63.5cm × 48cm) が収められている。この頃のパリは旧十二区分で、「パリ最新地図」では各区は四色で分けられ、周りを囲むように通り名がアルファベ順に並び、地図から探し出すことができるよう工夫されている。この地図に書き込まれた「通り名リスト」は、1863年版のアドルフ・ジョアンヌの名が冠された『パリガイド』*Le Guide parisien par Adolphe Joanne*になると独立し、「パリの全通り・広場のアルファベリスト」*Liste alphabétique de toutes les rues et places de Paris* となって本文末に組み込まれる<sup>6)</sup>。

1860年のオスマンによるパリ大改造開始後の1863年版『パリガイド』はアドルフ・ジョアンヌが編纂したこともあって、1855年版『パリ・イリュストレ』と異なる点も多い。特に注目すべきは1855年版にあった「パリの名の由来」から始まったパリの歴史がすべて取り除かれ、本文をパリの「位置」*Situation* (緯度と標高) とパリの「気候」*Climat* から始める点である<sup>7)</sup>。ここには1855年版とは違ってパリを客観的に記述しようとするアドルフ・ジョアンヌの意思を認めることができる。これは小型携帯版の「パリ・ダイヤモンド」でも引き継がれ、1867年版『パリ・ダイヤモンド』では、序に総合案内の「パリ到着」*Arrivée à Paris* を置き、公共交通、ホテル、レストラン、カフェ、大使館と省庁、警察、郵便などを紹介した後、パリ見学を一日、二日、一週間、二週間のモデルコースで示し、美術館や図書館などの住所と開館時間を教える。そして本編は、パリの位置と気候、行政区分から始まり、各章はブルバール、河岸、広場、通り、庭園、教会、王宮などに分けてパリを案内し、第二十五章「シャン・ド・マルスと1867年の万国博覧会場」*Le Champ de Mars et le Palais de l'Exposition universelle de 1867*で終わる<sup>8)</sup>。

このような旅行案内書が研究の対象となるのは1980年代中頃からである<sup>9)</sup>。既に「観光学」は定着しているが、旅行案内書は「観光学」のみが研究の対象とするものではないだろう。旅行案内書は地域の情報を集めた単なる案内に留まらず、その記述と表象、更には案内書の生成からその時代を照らし出すことができるからである。「ギッド・ジョアンヌ」では、最初期の1855年版『パリ・イリュストレ』で「パリの名の由来」が語られるが、アドルフ・ジョアンヌが編纂した1863年版『パリガイド』は実用性と客観性から「パリに到着」やパリの「位置」が優先され、1867年版『パリ・ディアマン』では万国博覧会のための章を設けた。旅行案内書には地図が欠かせないが、地図を有効に利用するには「通り名リスト」も必要になるだろう。また、携帯を前提とするならば小型軽量化されなければならない。旅行案内書は時代の要請に合わせて変化するのである。

\*

パリの案内書の起源はどこにあるのだろうか。時代は遡って十六世紀、フランス最初のパリ案内書はジル・コロゼ Gilles Corrozet の『古代の華』*La Fleur des Antiquitez* とされている。十八世紀の国務評定官で地理学者のピガニョール Piganiol (Jean-Aimar Piganiol de la Force) はジル・コロゼがパリの歴史を書き表した「最初の著者」Auteur original とする<sup>10)</sup>。ルイ十四世に近い地図出版者ジャイヨ Jaillot もフランソワ一世以前にパリの歴史を書いたのはジル・コロゼであると言い<sup>11)</sup>、ピガニョールとジャイヨは1532年の『古代の華』を挙げる。もちろん二人とも十九世紀の「ギッド・ジョアンヌ」のような旅行案内書を念頭に置いたわけではないが、それでも『古代の華』がパリを記述し、パリを紹介した最初のテキストであるとしたことに違いはない<sup>12)</sup>。

ジル・コロゼは1510年1月4日にパリで生まれた<sup>13)</sup>。詩人として出発し、ラテン語、イタリア語、スペイン語に長けたジル・コロゼは多くの翻訳を上梓した後に出版書籍商になる<sup>14)</sup>。その著作は、詩、(騎士道風)物語、翻訳、歴史、エンブレム集、格言集、外国語文法書など多岐にわたり<sup>15)</sup>、著作のみでなく印刷出版にも携わる多才ぶりによってジル・コロゼは「知の伝達者」<sup>16)</sup>として再評価されつつある。

ジル・コロゼが『古代の華』をドニ・ジャノ Denis Janot から上梓したのは1532年、二十二歳の時である。コロゼはこのドニ・ジャノから『アポロニウス物語』*La plaisante et agréable histoire d'Apolonius prince de Thir* (後にシェイクスピアが『ペリクリーズ』とする「タイヤのアポロニウス物語」)の仏訳を1530年に出すが、この仏訳『アポロニウス物語』のタイトルには「若きコロゼ」Corrozet en ses jeunes ans が翻訳したと記されていた<sup>17)</sup>。これ以前にもコロゼは数点の著作を上梓しており、いずれも出版年は確定していないが、既に十五歳で詩を作ったことも分かっている<sup>18)</sup>。『古代の華』でパリを記述したコロゼは、他の都市の歴史にも

関心を持ち、1535年には『ガリアの古代都市建設』*Les Antiques erections des Gaules*を上梓して「ガリア」の六十一の都市と地域の建設を語った<sup>19)</sup>。

コロゼは1550年に『古代の華』の改訂版として『パリの古代、歴史、榮譽』*Les Antiquitez, histoires et singularites de Paris*を自ら出版するが、パリ商人奉行（パリ市長）クロード・ギヨ Claude Guiot への献呈文で「同じ書名の小冊子（=1532年版『古代の華』）は取り消して無に帰し、誤りや嘘を正してこのたび全く新しくした」<sup>20)</sup>と述べている。そして、おそらく生前最後の「パリ案内書」となった1561年版『パリの古代、年代記、榮譽』*Les antiquitez, chroniques et singularitez de Paris*の表紙には「第二版として加筆修正された」*Corrigées et augmentées pour la seconde edition*<sup>21)</sup>とある。ここで「第一版」として念頭に置いているのは1550年版であって、1550年の時点で「取り消して無に帰した」1532年版ではないであろう。要するに、1550年版が「初版」、1561年版は「第二版」であり、コロゼは二十二歳で上梓した若書きの『古代の華』を世に残すつもりがなかった。しかし、わたしたちに関心があるのは、むしろこの若書きの『古代の華』である。

『古代の華』の版本は十点知られている。初版とされる1532年ドニ・ジャノ版（以下「1532年ジャノ版」）、1532年ガイヨ・デュ・プレ Gaillot du Pré 版（以下「1532年デュ・プレ版」）が二刷<sup>22)</sup>、1533年フィリップ・ル・ノワール Philippe Le Noir 版、1533年ギヨーム・ド・ボッソゼル Guillaume de Bossozel 版、1534年ジャン・サヴティエ Jean Savetier（ピエール・セルジャン Pierre Sergent）版、1534年ドニ・ジャノ（ピエール・セルジャン）版<sup>23)</sup>、1535年ジャン・サヴティエ（ピエール・セルジャン）版（記録のみで版本は現存していない）、1539年（ピエール・セルジャン）版、1543年ピエール・セルジャン版（以下「1543年セルジャン版」）である<sup>24)</sup>。1532年の初版から1543年までの10年ほどの間に少なくとも九回繰り返し印刷されたことになり、『古代の華』が人気を博した作品であったことがよくわかる。そして繰り返し印刷されていく中で、この「パリ案内書」は加筆・修正、そして増補されていくが、十九世紀の「パリ・ディアマン」のように毎年改訂というわけにはいかない。それでも大きな異同はあって、1532年デュ・プレ版には「パリの通り、教会と学寮の名」*Les noms des rues, des eglises, des colleges de Paris*が加えられるし、1543年セルジャン版には拡大版「通り名リスト」<sup>25)</sup>と「パリ市民ひとりあたりの一日と年間の食料消費量」*la despence que une personne peult faire par an & par iour*、そして「ヴァンセンヌの森の塔の墓碑銘」*LEpitaphe de la gran tour du boys de Vicennes*とノートルダム大聖堂の紹介が入る。特にこの拡大版「通り名リスト」はそれぞれの通りに始点と終点が入られ、これまで別立てになっていた「教会リスト」の教会と「学寮リスト」の学寮がこの拡大版リストに溶かし込まれている。まさにパリ案内書の様相を呈するが、この1543年セルジャン版はコロゼの手によるものではないように思われる<sup>26)</sup>。本論では

1532年ジャノ版と1532年デュ・プレ版を取り上げ、ジル・コロゼがどのように「パリ案内書」を編みあげたかを考える<sup>27)</sup>。

\*

1532年ジャノ版『古代の華』(写真2 1532年ジャノ版 表紙)<sup>28)</sup>は、允許状、「ジル・コロゼの挨拶」、「プロローグ」、「目次」、「ウェルギリウスとメセナ」を描いた木版画、「パリ市の建設と古代」、ジル・コロゼの名がアクロステッシュで入った「パリ礼賛の詩句」、「トロイの剛勇ヘクトールの息子フランクスからフランス国王フランソワ一世までの系図」で構成されている。1532年デュ・プレ版ではこれに「通り名リスト」、「教会リスト」と「学寮リスト」が加わる。二十二歳のコロゼは「挨拶」の中で執筆の動機は「祖国愛」*amour patrialle*であり、「識者の疑わしき見解はすべて取り除き、いかなる創作も加えることなくパリの起源と建設を記述する」<sup>29)</sup>と述べる。「プロローグ」でも同じように「人は生まれた場所を愛し讃えるものである」<sup>30)</sup>と、執筆動機の「祖国愛」を繰り返す。ここからコロゼが『古代の華』でパリを紹介した動機が「祖国愛」であることがわかる。

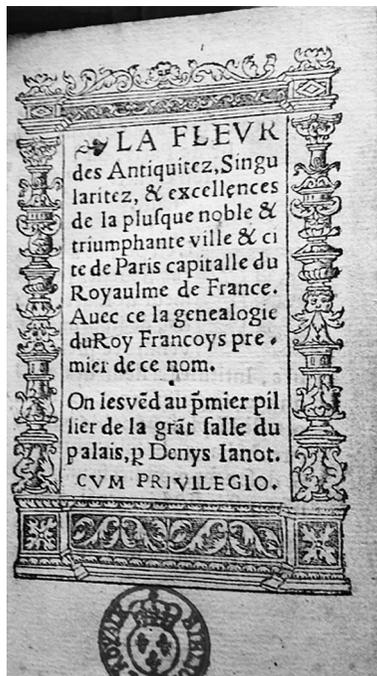


写真2 1532年ジャノ版

本論となる「パリ市の建設と古代」では、コロゼは1855年版『パリ・イリュストレ』のようにまずパリの起源から始めるが、その起源として四つの「意見」*opinion*を紹介する。第一は「ジャン・ルメール・ド・ベルジュの顕揚(=『ガリアの顕揚ならびにトロイアの榮譽』)」(f. 2<sup>r</sup>)である。ヤベテ Japhet の第四子サモテ Samothés の末裔であるロムス Romus の息子パリス Paris がガリアの十八代の王位に就いて、このパリスから「パリ」の名がついた。第二は、「バプティスト・マントゥアヌス」(f. 3<sup>v</sup>)の意見。ヘラクレスがガリアの地を通過した際にセーヌ川に中洲を認め、この島(シテ島)が気に入り、家々と建物を建設した。そして、その島に住む人々をギリシャの「パッラジア」Parrasia から「パリジャン」Parisiens とした。第三は「イシス」Ysis の信仰から。サン・ジェルマン・デ・プレは「イシス」Ysis を信仰したことがあるが(かつて「イシス像」がサン・ジェルマン・デ・プレに存在した)、パリの南東に位置し、同じくセーヌ川の島(サン・テティエンヌ島)の都市であるムラン Melun でも「イシス」を崇拝しており、パリとムランが近くて似ていることから「パル・イシス」*par Ysis*(「イシスに近い」の意)となり、ここから「パリジス」Parisis となった。この説は「権威ある記述が

ない」から信じ難いとコロゼのコメントが入るが (f. 8 v<sup>o</sup>)、1532年デュ・プレ版ではこの否定的見解は削除される<sup>31)</sup>。第四は最も確かであるとして、トロイア王プリアモスの息子パリス・アレクサンドル Paris Alexandre から取られた説を紹介する (f. 8 v<sup>o</sup>-f. 12 v<sup>o</sup>)。これは1855年版『パリ・イリュストレ』が「おとぎ話」として否定したものである。「ユージュ・ド・サン・ヴィクトールと『フランス年代記』の著者<sup>32)</sup>によれば」(f. 9 r<sup>o</sup>)、トロイアが滅亡する直前にヘクトールの息子フランシヨン Francion (=フランク) が「ハンガリー」Hongorie の「パンノニア」Pannonie に渡って「シカンブリア」Sicambre を建設する。シカンブリアを建設して230年経ったとき、「イボール」Ybros が22,000人の軍勢を引き、「ゲルマニア」に侵入し、ライン川を渡ってガリアに入り、セヌ川に「シテ」を築いて「リュテース」Luthesse と名付けた。ここが泥と砂でできた肥沃な土地だったからである。それは紀元前830年のことであった。彼らは自らのトロイア王プリアモスの息子パリスの栄誉を讃えて「パリジャン」Parisiens としたが、そのギリシャ語「パリジア」Parisia はラテン語では「果敢」hardiesse の意である。その後、ローマが侵攻してくると、カエサルの『ガリア戦記』六巻と七巻から、ラビエヌス率いるローマ軍とカムロゲヌスを中心とする「パリジャン」の攻防が語られる<sup>33)</sup>。ここからはやや曖昧なところもあるが、カエサル後もパリはそのまま残り、テオドシウス帝の時代にローマ軍によって攻められたシカンブリアの団が「イボール」Ybros<sup>34)</sup> に率いられてリュテースにたどり着き、同じシカンブリアの同胞とともに暮らした (f. 16 v<sup>o</sup>)。

これら四つのパリ起源の「意見」は、多分に「フランク伝説」とジャン・ルメール・ド・ベルジュ Jean Lemaire de Belges の『ガリアの顕揚ならびにトロイアの栄誉』*Illustrations de Gaule et Singularité de Troie* の影響を受けている。「フランク伝説」はアイネイアースによるローマ建国をモデルにして七世紀に始まった<sup>35)</sup>。『フレデガリウス年代記』(660年頃) がアイネイアースの従兄弟としてフランク (フランシヨン Francion) を登場させ、フランクはトロイアから逃れてライン川とダニューブ川の間でシカンブリアを作った。また、『フランク王国史』*Gesta regum Francorum* (727年) ではアンテノールとプリアモスの周りにいた者たちがダニューブ川沿いにシカンブリアを作ったとする。フィリップ二世に「尊厳王」Auguste の名を付けた十二世紀のサン＝ドニの年代記作者リゴール Rigord がこの二つを結びつけて体系化し、フランクはヘクトールの息子 (ヘクトールの息子はアステアナクスのみであったはずである) としてトロイアの直系とした。リゴールの年代記『フィリップ＝オーギュスト史』*Gesta Philippi Augusti* (1216-1220年) でこのパリの歴史が語られるのは、フィリップ＝オーギュストが王宮の窓からシテ島の路上を見たとき、馬車が跳ね上げた泥から出た悪臭に耐え切れず、パリ中の街路を石畳にすることを命じたあの有名なエピソードの直後である<sup>36)</sup>。リゴールは、『フランク王国史』でもフランク族最初の王はファラモン Pharamond で、彼

はアウストラシア族の王プリアモスをその父に持つマルコミール Marcomir の息子であるとされており、この血筋はヘクトールの息子フランクスまで遡ることができると述べて、「トロイア王プリアモス」Priamus rex Troje の系譜を示す。この後、フランクスによるシカンブリアの建国、「イボール」Ibor のリュテースへの到着、ヴァレンティニアヌス一世の時代にマルコミールが率いた同じトロイアの末裔がリュテースに迎えられまでの歴史を記す。パリの名はトロイア王プリアモスの息子パリスから取られ、彼らは「パリ人」Parisien と自らを呼んだが、ある者たちはこの「パリ人」はギリシャ語の「勇気」parrhisia に由来すると言う<sup>37)</sup>。この後はファラモンがフランク族最初の王であること、その後はクロディオ Clodion、メロヴィクス Mérovée、キルデリク Childéric、クロヴィス Clovis と王位が続く。このリゴールによって体系化されたフランクス伝説は十二世紀以降も数々の年代記で語り継がれる<sup>38)</sup>。

この「フランクス伝説」を大きく変えたのはコロゼもその名を挙げているルメールの『ガリアの顕揚ならびにトロイアの栄誉』である。ルメールはリゴールの枠組みを逆転させる。トロイア人からガリア人が生まれたのではなく、その逆でガリア人からトロイア人が生まれた<sup>39)</sup>。大洪水の後にノアがガリアを建国し（第一巻四章）<sup>40)</sup>、ガリアは第三子ヤベテ Japhet の第四子サモテ Samothés の時代に繁栄する（十章）。その後、ガリアは九代王ケルト Celte、十代王リビアのヘラクレス Hercules de Libye、十一代王ガラテス Galateus と続き、やがてリビアのヘラクレスの息子の系統からダルダヌス Dardanus が生まれる。ダルダヌスは兄を殺したことでギリシャのサモス島に逃れ、その後トロイアを建国する（十四章、十五章）。ルメールはダルダヌスの子孫によるトロイア建国を語る一方で、ガリアではロムス Romus の息子パリス Paris が十八代の王位に就いたとする（十六章）。このパリスから「セヌ川に位置する高貴な王国の都市に今日の名が付けられ」<sup>41)</sup>、それは紀元前147年のことであったという（コロゼはこれをパリ起源の第一の「意見」とした）。ルメールはその後トロイア建国とガリア王の系譜を並行して語る。系譜を語りながら、王が生まれ、あるいは移動する先々で建設された国や都市の名称がその王の名と深い関わりがあることが示される（「アルボン」Harbon 王から「ナルボンヌ」Narbonne、「リュグデュス」Lugdus 王から「リヨン」Lyon（いずれも十三章）、「ナム」Names 王から「ナント」Nantes（十八章）など）。やがてトロイアでは王プリアモスとヘカベーからパリス・アレクサンドロスが生まれ（二十章）、そこから「パリスとオイノネの物語」が始まり、トロイア戦争、パリスの死と埋葬まで延々と続く（二十一章から四十四章、更に第二巻一章から二十一章まで）<sup>42)</sup>。第三巻では系譜に戻り、トロイア滅亡の際にヘクトールの息子フランクスに率いられてヨーロッパに脱出したトロイア人がシカンブリアを作り、やがて彼らはローマ人と幾度も対峙しながらカエサル時代に自らの祖先の地であるガリアにやってくる。ルメールはフランス王朝の源流はトロイアではなく、それよりも古く聖書のノアの時代に

遡るほど脈々と続くことを示すことで当時のフランス王国に「歴史」、更にいえばローマよりも古い「歴史」という権威を与えた。この国威高揚はフランス王権が望むところでもあった。

「フランクス伝説」は、十六世紀後半になるとロンサールの『フランシヤッド』*La Franciade*を生み出す一方、考証研究によって否定されていくが<sup>43)</sup>、十七世紀になると息を吹き返す。実証主義的な考証を経験した上でもなお伝承に重きが置かれたのは、「フランクス伝説」がフランス王国の存在理由と威信に関わることであったからであろう<sup>44)</sup>。そして、この「フランクス伝説」は、1855年版『パリ・イリュストレ』の「おとぎ話」に見られるように十九世紀のパリ案内書にも影を落としている。

以上見てきたように、「パリ市の建設と古代」のパリ起源に関する四つの「意見」は、それまでに蓄積された「フランクス伝説」とルメールの『ガリアの顕揚ならびにトロイアの榮譽』の影響が強く現れている。影響というよりも、ジル・コロゼが「意見」を「流用」*compilation*して再構成したとも言えるが、この「流用」はその後の「パリ市の建設と古代」の記述でも続く。

\*

コロゼは、その後の「パリ市の建設と古代」を、ラウル・ド・プレールのアウグスティヌスの仏訳『神の国』第五卷二十五章のパリの記述から借りる<sup>45)</sup>。例えば、「浴場」*Palais des termes*について1532年ジャノ版『古代の華』では「この名であるのは、年貢は命じられた期限に収めるからである。そして、人々はその館の周りに家を立てて住み始め、この地域は多くの人が住む場所となった。他方で、サン＝ドニ方面には長らく人が住み付くことがなかったが、今では最も密集している地域である。かつてここは林や大きな森が広がっており、殺人なども多かった。」と記述しているが、ラウル・ド・プレールのアウグスティヌスの仏訳『神の国』と比較するとコロゼがラウル・ド・プレールのテキストをほぼ忠実に再録していることがよくわかる<sup>46)</sup>。

«fut ainsi appelle pource que la se payoit le treu aux termes qui estoient ordonnez. Et adonc le peuple commença a edifier maisons entour celluy chasteau & eulx y loger, & commença lors celle partie a estre habitee premierement, ne depuis long temps ne fut habitee lautre partie de devers Saint Denys, la quelle partie aujourdhuy est la plus grande. Et pour lors y estoient gras boys & forestez ou se faisoient moult dhomicides.» (1532年ジャノ版『古代の華』、f. 17 r<sup>o</sup>)

«estoit ainsi appellé pour ce que la se payoient le trehuz aus termes qui estoient ordenés. Et adont les gens commencerent a edifier maisons a lenviron de ce chastel et a eulx y loger ; commença celle partie a estre premierement habitée. Nencores ne depuis longtemps ne fu lautre partie de Paris devers Saint Denys, la quele est a present la plus grant, habitée. Mais avoit partout forés et grans bois, et y faisoit len moult domicides.» (ラウル・ド・プレール訳アウグスティヌス『神の国』、pp. 107-108)

また、「パリ市の建設と古代」の中に唐突に出てくるパリの「ブルドネ通り」la rue aux Bourdonnoisと「食肉市場」marche des bestesの「プルソー広場」place aux pourceaulxはラウル・ド・プレールのテキストをそのまま流用した結果でもある<sup>47)</sup>。コロゼはシャトレ界限、サン・メリー門、セヌ川からシテとプチ・ポン、イノソン墓地とレ・アール、サン・ドニ門、カエサルによる「ドルイド教」Druidesの説明からモンマルトル、そして聖ドニと、パリの「名所」を一つひとつラウル・ド・プレールのテキストを使って紹介していく。

しかし、コロゼは単にラウル・ド・プレールのテキストを流用するばかりではない。ラウル・ド・プレールが挙げる「名所」にコロゼは追記する。例えば、ラウル・ド・プレールが、サン＝トノレ通りとラルブル・セック通りの角にかつてあった「トリオワールの十字架」la croix du trioirをそこで動物が引き裂かれた場所として紹介すると、コロゼはオーストラシアの王シギベルト一世の王妃ブルンヒルドが自らの数々の罪悪によって四頭の馬で四肢を引き千切られたと加える (f. 16 v<sup>o</sup>)。また、先に引用した「浴場」も、コロゼは「そこは今ではクリューニー館と呼ばれている場所である」<sup>48)</sup>と具体的に示し、更に1532年デュ・プレ版ではこの「クリューニー館」の説明に「マチューランの近くにある」pres les Mathurins (p. 21 r<sup>o</sup>)と追記している。このような1532年デュ・プレ版での加筆は、ラウル・ド・プレールのテキストに限らない。その後のフランス王家の系譜の中でも、コロゼの時代に近づくにつれて1532年デュ・プレ版への加筆は多くなる。要するに、ジル・コロゼは自らが知り得るパリの「最新情報」を追記して、結果的に十九世紀の旅行案内書「ギッド・ジョアンヌ」のような「改訂」を行ったのである。

ラウル・ド・プレールのテキストを離れると、ジル・コロゼはフランク族最初の王ファラモンから記述を続けるが、その前のレオー一世の時代(464年)に物語をひとつ挿入する。それは「ブルターニュ大年代記」grandes Cronicques de Bretagneから取ったと思われるアーサー王とローマ護民官フロロとの戦いである (f. 21 v<sup>o</sup>-f. 23 r<sup>o</sup>)。ローマ護民官によって荒らされたガリアを見たブルターニュのアーサー王がパリの「ノートルダム島」isle nostre dameでフロロと対決する。一対一の対決である。最初は槍、次は鈍。アーサー王はフロロから額に一撃を受けて出血し、その血が両眼に流れて窮地に立たされる。その時、聖マリアが現れ、アーサー王を「白テンの覆いのようなマント」manteau qui sembloit estre fourre dhermines (f. 22 v<sup>o</sup>)で覆う。するとフロロはそのマントのまばゆさに眼を奪われ、その隙にアーサー王はフロロに一撃を与えて打ち負かす。そうしてブルターニュ王家は白テンを紋章とし、アーサー王を救った聖マリアが現れた場所にはその榮譽を讃えてノートルダム大聖堂が建立されたという。この物語が挿入された真意はよくわからないが、ひとつはローマを打ち負かしたことであり、ひとつはノートルダム大聖堂建立の根拠を与えたいこと、そしておそらくもうひとつは、『古代の華』に読み物としての娯楽性を与えることであろう。『古代の華』はそれぞれの項目を語り終えると、

コロゼはその項目の内容を六行詩、七行詩、八行詩などでまとめる。例えば、アーサー王とローマ護民官フロロとの戦いは次のように七行詩にまとめられる。

« Le Roy Artus apres quil eust victoire	アーサー王は勝利した、
Contre Flolo par la vierge Marie,	処女マリアのおかげでフロロに対して、
De par luy fut pour en avoir memoire.	その後、王はこれを記憶させるため、
Une chappelle audict lieu establie	その場に聖堂を建立した
Dedans Paris & est sans menterie	パリの中、嘘偽りないことだが
Le propre lieu plain de renom & fame	有名で、評判の場所
Ou present est leglise nostre Dame »	今のノートルダム大聖堂である。

(f. 23 r<sup>o</sup> - v<sup>o</sup>)

このまとめの詩句も、アーサー王とフロロの戦いの物語とともに読者を意識したものと考えられる。出来事を詩句でまとめることで読者の理解を助け、逸話を実在する建物に結びつけることによって読者の想像を膨らませ、その建物の存在を強く印象付ける。この語りは名所の逸話を挿入する十九世紀の旅行案内書の手法を思い起こさせる。

\*

さて、その後の「パリ市の建設と古代」は、マルコミールの系統やリュテースからパリへの名称変更など、やや整理されていない印象を受けるが、先述したように初代フランス王としてファラモンが王位に就き、その後、クロディオ、メロヴィクス、キルデリク、最初のキリスト教徒の王クロヴィスと続く。クロヴィスが「以前はサン・ピエールの山と呼ばれていたパリの山に今はサント・ジュヌヴィエーヴ・オ・モンという名の教会を」une eglise qui de present est appellee Sainte Genevieve au mont de Paris qui paravant sestoit nomme le mont Saint Pierre (f. 26 r<sup>o</sup>) 建てた。また、キルデベルト Childebert はパリ城壁外に「パリ大司教サン・ジェルマン殿を埋葬するため現在はサン・ジェルマン・デ・プレ教会と呼ばれる修道院」laquelle de present est appellee Saint Germain des prez a cause de monseigneur Saint Germain eveque de Paris qui y fut enterre (f. 27 r<sup>o</sup>) を建立し、キルデベルト王はこのサン・ジェルマン・デ・プレ教会に眠っている。シャルルマーニュは大学の起源とも言える学校をパリに作り、アルクインをイングランドから呼び、彼を含めて四人の「偉大なクレルク」grans clerzcz が大学の基礎を築きあげて「知の源泉はそれ以来ずっと続く」la vraye source & fontaine de science y a toujours de puis estre (f. 28 v<sup>o</sup>)。そして「シャルルマーニュはパリとモンマルトルの間にサン・ジャック教会を建立するが、これは現在ではパリ城壁内にあってサン・ジャック・ド・

ロピタルと呼ばれている」Celuy Charlemagne fist edifier leglise Saint Iaques entre Paris & Montmarte laquelle est de present enclose dedans Paris & sappelle Saint Iaques de lhospital (f. 28 v<sup>o</sup>-f. 29 r<sup>o</sup>) (以上の下線強調は平手)。コロゼは、フランス王位を順に辿りながら、それに関連する建築物などを「現在は」de present どうであるのか、「それ以来ずっと」 toujours de puis どうなのかと現在の視点で記述する。この「現在の視点」は『古代の華』を手取る読者の立場で書かれており、それはまさに「案内書」の記述に相応しいと言えるだろう<sup>49)</sup>。

時代が下るにつれて増える1532年デュ・プレ版の加筆にも注目すべきものがある。フィリップ＝オーギュスト治世下のパリ城門 (p. 38 v<sup>o</sup>) やルイ九世妃マルグリットが「フランチェスコ修道会」をサン・マルソー Saint Marceau に建立したこと (p. 40 v<sup>o</sup>) などが追記されるが、パリの出来事や建物だけでなく、ルイ十世の時代には「ジャン・ド・マンという名のフランス詩の王が『薔薇物語』を著してパリで大活躍した」<sup>50)</sup> とパリの文芸を紹介する。また、「1413年のことであるが、パリのノートルダム大聖堂に巨大で見事な聖クリストフ像が某氏によって建立され同教会で見ることができる」<sup>51)</sup> と加筆する (この「聖クリストフ像」は10メートル近くの高さの巨大なものであったが、1785年に破壊された)。これも現在の視点からの追記と言ってよいだろう。しかし、最大の追記は「パリ市の建設と古代」の最後に位置するフランソワ一世の治世下で、1528年の「デュ・マン学寮」college du Mans の開設、テンプル教会に作られた二つの礼拝堂、1532年8月9日 (正しくは8月19日) のサン・ユスターシュ教会建立の礎石 (隅石)、サン・バルテレミ教会やサン・ヴィクトール修道院などに手が加えられたことが次々に挙げられる。ここで興味深いのはテンプル教会に作られた二つの礼拝堂で、「これら二つとも金と紺碧の装飾で彩られ、その見事な美しさが評判である」<sup>52)</sup> と同時代の意見を紹介しているが、これも「案内書」にある経験談として読むことができる。

ジル・コロゼは「パリ市の建設と古代」冒頭では「四つの意見」を同時代あるいは過去の著作から援用し、次にラウル・ド・ブレールのテキストを「流用」したが、それ以降の「パリ市の建設と古代」ではどのように記述したのだろうか。それは「パリ市の建設と古代」の終わりに示されるが、コロゼは、やはりここでも前半と同様に、建築物とその建立、創設者の名前などを「古い年代記」anciennes Cronicques (f. 49 r<sup>o</sup>) から取った。そして、その最新情報は1532年ジャノ版では1531年 (f. 49 v<sup>o</sup>)、1532年デュ・プレ版では1533年 (p. 50 r<sup>o</sup>) までであると言う (ここから「1532年デュ・プレ版」は1533年に出版されたと考えられる)。ここにもできるだけ最新の情報を書き込もうとする努力を読むことができる。まさに十九世紀の「パリ・ダイヤモンド」のアドルフ・ジョワヌヌを思い起こさせるのではないだろうか。

## \*

1532年ジャノ版は「パリ市の建設と古代」の後、ジル・コロゼの名がアクロステッシュで入った詩句と「パリ礼賛の詩句」が続き、最後は「トロイの剛勇ヘクトールの息子フランクスからフランス国王フランソワ一世までの系図」で終わる。この「系図」は1532年デュ・プレ版との異同はないが、デュ・プレ版はこの「系図」の前に、「パリの名のエピグラム」Epigramme sur le nom de Paris (p. 53 v<sup>o</sup>-p. 54 r<sup>o</sup>)と「たゆたえども沈まず」Fluctuat nec mergiturで知られる「パリ市紋章」を讃える「パリ市の紋章のブラゾン」Blason des armes de la ville de Paris (p. 54 r<sup>o</sup>)、そして重要な追記である「通りの名 ここから通り、教会、学寮の名が始まる」Les noms des rues Cy commencent les noms des rues, esglises & colleges de Parisが加えられる。

この「通りの名」は、通り、教会、学寮の名前の三つのリストから成る(写真3 1532年デュ・プレ版「通りの名」p. 54 v<sup>o</sup>)。通りは「広場」placeも含めて「レ・アール」(82の通り)、「ボーデ門」(96)、「シテ」(28)、「大学」(56)の四地区のリストからなり、合計262の通り名が並ぶ。一方、教会は「シテの教会」(26の教会)から始まり「大学」(32)、「レ・アールとボーデ門」(43)の三地区の合計101の教会、そして、学寮はひとかたまりで49の学寮名が載っている。「通り名リスト」にはないが、「教会リスト」の中には、サント・ジュヌヴィエーヴ・ラ・グランド教会 Sainte genevieve la grandeのように「この教会はかつて聖ペテロと聖パウロを讃えて建立され、最初のキリスト教徒フランス王クロヴィスを埋葬している」<sup>[53]</sup>や、キャーンズ・ヴァン教会 Leglise des quinze vintzのように「聖王ルイが聖レミの栄誉を讃えて建立した」<sup>[54]</sup>と説明が加えられる教会もある。リストとはいえ、十九世紀のパリ案内書のように「通り名リスト」の名称がアルファベ順に並ぶのではない。地区別に取りまとめられていることから分かるように、近接する通り、教会、学寮を順に並べたリストである。これは、探すためのリストではなく、存在を示すためのリストである。

中世の通り名<sup>[55]</sup>を近接する順に並べると言えば、直ちに落語の「道中付け」のようなギヨ・ド・パリ Guillot de Paris の『パリの通りのディ (賦)』*Le Dit des Rues de Paris* (十四世紀初頭)が思い起こされる。ギヨの「ディ」で展開される通り名も近接する通りの順に並べられており、1532年デュ・プレ版の「通りの名」の順とも似たところがあることから、通り名の読

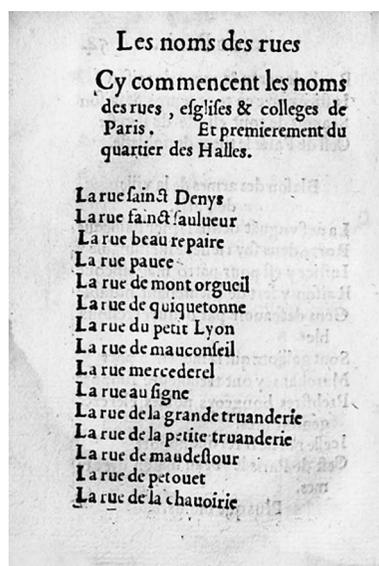


写真3 1532年デュ・プレ版

み上げにはひとつの伝統があったに違いない<sup>56)</sup>。1863年版の『パリガイド』でも触れたように、「通り名リスト」は十九世紀の旅行案内書でも独立して販売された。探すためのリストと存在を示すためのリストという違いはあるものの、この伝統は十九世紀まで受け継がれたと言ってもいいのかもしれない。実際、「通り名リスト」は十五世紀末から十六世紀中頃にも印刷されており、少なくともフランス国立図書館に四点、パリ歴史図書館に一点の版本が残されている<sup>57)</sup>。これまで見たように、ジル・コロゼはテキストの「流用者」であるから、この1532年デュ・プレ版の「通りの名」のリストもこの伝統にあるテキストを流用したと考えるのが自然であろう。そもそも、262の通りと101の教会、そして49の学寮の名称を近接したものから順に自ら書き連ねることなどあり得ない。事実、1532年デュ・プレ版のリストを現存する版本と照らし合わせると、フランス国立図書館が所蔵する版本（RES-LK7-26878）と一致する。この版本は、通り、教会、学寮の三つのリストの並び順だけでなく、三つの教会の補足説明まで同じである。他の版本と同様に、通りと教会の名称、そしてパリの一日と年間の食料消費量、ヴァンセンスの森の塔、ノートルダム大聖堂の紹介などで構成されているものの、学寮名のリストも記載された数少ない版本のひとつである。おそらくコロゼはこの版本あるいはこの系統に属する版本を、通り、教会、学寮の三つのリストとして流用したのであろう<sup>58)</sup>。

\*

「祖国愛」から出発したジル・コロゼの『古代の華』はテキストを「流用」した「パリ案内書」であった。「パリ市の建設と古代」の冒頭ではルメールを始めとする識者の見解を四つの「意見」にまとめ、次にラウル・ド・プレールによるアウグスティヌスの仏訳『神の国』を下地にしながら自らの知見を書き加え、諸王の系統では「古い年代記」を利用しながら最新情報を加え、更に1532年デュ・プレ版では通り、教会、学寮の三つのリストから成る「通りの名」を織り込んで『古代の華』を作り上げた。「疑わしいところは取り除いて、いかなる創作も加えることなく」と言いながらも、二十年後には「取り消して無に帰し」と言うのだからコロゼ自身の中では成功作とは言えないかもしれない。しかし、『古代の華』はこの後何度も版を重ねて人気を博すのである。

ジル・コロゼにテキストの「流用」を可能とさせたのは、コロゼが単に著作者に留まらず、書籍商でもあって、身近に多くの印刷工房があり、そこで数多くのテキストを見る機会を得ていたからに違いない。「二足のわらじ」がテキストの「流用」を可能とさせた。コロゼの多様な著作がそれを物語っている。そして、「祖国愛」もテキストを「流用」して『古代の華』を編み上げた原動力であったのではないだろうか。「フランクス伝説」やルメールを使って、フランス王国のパリが、ローマを凌駕し、トロイア起源の歴史を持つことを書物としたのは、取りも直さず自らの「祖国愛」に答えることであり、その国威高揚は時の王権フランソワ一世と

その周りが望むところでもあった。テキストの「流用者」は、つまるところ「祖国愛」に満ちた「知の伝達者」でもあった。

十九世紀のパリ案内書に欠かすことができないものとして地図を挙げたが、コロゼの『古代の華』には「通り名リスト」はあってもパリの地図はない。それもそのはずで、十四世紀初頭まで遡る「通り名リスト」の「伝統」とは異なり、パリの地図は十六世紀の前半に作成が始まったばかりだからだ<sup>59)</sup>。1550年頃にパリのモントルグイユ街のジェルマン・オヨ Germain Hoyau とオリヴィエ・トルッシェ Olivier Truschet によって製作された「バーゼルの地図」plan de Bâle の左下と中央のカルトゥーシュには「パリ礼賛の詩句」が掲げられている。この詩句も「折り句」で「ジル・コロゼ」Gilles Corrozet と読むことができるが、この「パリ礼賛の詩句」は二つの『古代の華』1532年ジャノ版 (f. 49 v<sup>o</sup> -f. 55 r<sup>o</sup>) と1532年デュ・プレ版 (p. 50 r<sup>o</sup> -p. 53 v<sup>o</sup>) の「パリ礼賛の詩句」と同じものである<sup>60)</sup>。「知の伝達者」ジル・コロゼが地図の作成に関与したのか、それともオヨとトルッシェが『古代の華』から「流用」したのか、それは分からない。ジル・コロゼが1568年に亡くなるまでに、パリの案内書は1550年の『パリの古代、歴史、榮譽』、1561年の『パリの古代、年代記、榮譽』と改訂される。おそらくそれは「全く新しい」パリ案内書となったはずである。そこにパリの地図と「通り名リスト」はどう関わったのだろうか。そして「パリ案内書」はどう読まれたのだろうか。それを知るためには新たな稿を起こさねばならない<sup>61)</sup>。

## 注

- 1) H. Morlier, *Les Guides-Joanne, Genèse des Guides-Bleus*, Les Sentiers débattus, 2007, p. 18.
- 2) 実質的には1867年である (*Ibid.*, p. 505)。この1867年は日本も初めて出展するパリ万国博覧会で、*Paris-Diamant* は仏、英、独、西語の四ヶ国語で出版された。
- 3) L. Lèpan et P. Duhamel, «Un discours mis en image : Paris à travers les Guides Joanne - Guides bleus (1863 à 2010). Une approche exploratoire et diachronique de l'espace touristique», *Mondes du Tourisme*, N° 6, décembre 2012, p. 7.
- 4) 正確には *Guides-Cicerone Paris Illustré, son Histoire, ses Monuments, ses Musées, son Administration, son Commerce et ses Plaisirs, Nouveau guide des voyageurs*, Hachette, 1855.
- 5) *Ibid.*, p. 43.
- 6) Morlier によると「通り名リスト」が本文に組み込まれるのはこの1863年版からで、リストはパリの地図とともに1864年から *Liste alphabétique des Rues de Paris* として別売された。このリストの前身は F. Lock, *Guide alphabétique des rues et monuments de Paris*, Hachette, 1855であり (H. Morlier, *op.cit.*, pp. 102-103)、「通り名リスト」は独立性に加えて「伝統」があることを示唆している。
- 7) *Le Guide Parisien par Adolphe Joanne*, Hachette, 1863, pp. 49-50.

- 8) しかし、不思議なことに1867年版 *Paris-Diamant* には「通り名リスト」が本文にも同梱のパリ地図にも記載されていない。Morlierによると *Paris-Diamant* シリーズで「通り名リスト」が本文に組み込まれるのは1872年版からである (H. Morlier, *op.cit.*, p. 507)。
- 9) E. Cohen et B. Toulhierによるとこの転換となったのは Nordman が Guides-Joanne について論じた論文 (D. Nordman, «Les Guides-Joanne. Ancêtre des Guides bleus», In P. Nora, *Les Lieux de mémoire*, t. 2 : Nation, Gallimard, 1986) である (E. Cohen et B. Toulhier, «Les guides de tourisme, un patrimoine et un objet d'étude», In *In Situ*, No 15, 2011, p. 1)。
- 10) Piganiol de la Force, *Description de Paris*, t. 4, Theodore Legras, 1742, p. 544. Piganiol はまた、第一巻の序で「パリ案内書」は Corrozet の生前に二度、死後には何度も印刷されたとする (*Ibid.*, t. 1, Préface, p. ii)。
- 11) Jean-Baptiste-Michel Renou de Chauvigné dit Jaillot, *Recherches critiques, historiques et topographiques sur la ville de Paris, premier quartier La Cité*, discours préliminaire, Lottin, 1772, p. 6.
- 12) 正確に言えば、*La Fleur des Antiquitez* 以前にパリを記述したとされるテキストは少なくとも三点ある。Le Roux de Lincy によると、Jean de Jandus の二つの *Eloge de la ville de Paris*、本論でも扱う Raoul de Presles による Augustin の仏訳『神の国』注釈、そして Guillebert de Mets の *Description de la ville de Paris* である (Le Roux de Lincy, *Paris et ses historiens aux XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècles*, Imprimerie Impériale, 1867)。
- 13) 没年は1568年7月4日。モーベール広場に隣接していたカルメル会修道院の回廊に埋葬された。墓碑銘には「一五六八年 / 七月四日 / 夕刻六時 / ジル・コロゼ没す / 五十八歳」とあった。Gilles Corrozet の生没年については François de La Croix Du Maine, *Premier volume de la Bibliothèque du sieur de La Croix Du Maine*, Abel l'Angelier, 1584, p. 128 と Piganiol (*op.cit.*, t. 4, p. 544) を参照。
- 14) このことはすでに触れたことがある (平手友彦「パリ古地図のサン・ドニ通り - 1517年パリ入市式とパリ案内の書『古代の華』」、『欧米文化研究』第26号、2019年、pp. 59-80)。Gilles Corrozet のパリの歴史に関する研究は、Bonnardot (A. Bonnardot, *Etudes sur Gilles Corrozet et sur deux anciens ouvrages relatifs à l'histoire de la ville de Paris*, Guiraudet et Jouaust, 1848; A. Bonnardot, *Gilles Corrozet et Germain Brice, Etudes bibliographiques sur ces deux historiens de Paris*, H. Champion, 1880) から始まり、M. Dumolin, «Notes sur les vieux guides de Paris», In *Mémoires de la Société d'histoire de Paris et de l'Île-de-France*, XLVII, 1924, pp. 209-285 と続き、比較的最近の研究には次のものがある。M. Vène, *Gilles Corrozet (1510-1568), libraire parisien, poète, historien : un esprit de la renaissance, diplômé d'archiviste paléographe, École nationale des chartes*, Paris, 1996 (博士論文で未完); C. Liaroutzos, *Le pays et la mémoire : pratiques et représentation de l'espace français chez Gilles Corrozet et Charles Estienne*, Champion, 1998; G. Chabaud, «Images de la ville et pratique du livre : le genre des guides de Paris (XVII<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècles)», In *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 45-2, 1998, p. 323-345; N. Mueggler, «Le Labeur du compilateur : Gilles Corrozet, auteur, éditeur, libraire», In *L'Éditeur à l'œuvre: reconsidérer l'auctorialité ? (fin XV<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècles)*, actes du colloque de Bâle 11-13 octobre 2018, Plateforme Emono Universitätsbibliothek Basel, 2020, pp. 22-29.

- 15) Niceron は Corrozet の著作を34点数え上げている (J.-P. Niceron, *Mémoires pour servir à l'histoire des hommes illustrés dans la république des lettres*, t. 24, Briasson, 1733, pp. 149-159)。
- 16) M. Vène, «Pour ce qu'un bien caché [...] ne peult troffiter à personne», «J'ay prins d'altruy la pierre et le ciment», Gilles Corrozet, auteur et libraire, passeur de textes», In *Passeurs de textes, imprimeurs et libraires à l'âge de l'humanisme*, Publications de l'Ecole nationale des chartes, 2012, p. 213.
- 17) この版本は残っていない (S. Rawles, *Denis Janot (fl.1529-1544), parisian printer and bookseller, A Bibliography*, Brill, 2018, p. 212)。
- 18) Mueggler が指摘するように、祖父 Pierre Le Brodeur の元で書籍商の見習いをしていた Corrozet は、十五歳で作った八行詩を Valerius Maximus の仏訳『言行録』*La Floraliere* の巻末に入れた (N. Mueggler, *op.cit.*, p. 22)。そこには「次の八行詩を成したジル・コロゼは無名のクレルク (学僧) のひとりで、まだ学芸では身を立てていない」«Gilles Corrozet est nomme / celluy qui a faict ces huyt mettres / Entre les clercs non renomme / Car il nest pas fonde es lettres.» と読むことができる (V. Maxime, *Le Floraliere, recueil et epithome des hystoires*, traduit par Guillaume Michel, Pierre Le Brodeur, 1525, f. lxxx v<sup>o</sup> (BnF RES-Z-938))。
- 19) この1535年版 *Les Anticques erections des Gaules* で初めて Gilles Corrozet に「書籍商」libraire の肩書が付く (M. Vène, «Pour ce qu'un bien caché [...] ...», pp. 199-200)。
- 20) «un petit livret ainsi intitulé, lequel j'ay supprimé et mis à neant, emendant ses erreurs et fables et faisant cestuy ci tout neuf par forme de memoires et croniques» (G. Corrozet, *Les Antiquitez, histoires et singularites de Paris*, G. Corrozet, 1550, f. a.iiii v<sup>o</sup> (BnF LK7 5983))。
- 21) G. Corrozet, *Les antiquitez, chroniques et singularitez de Paris*, G. Corrozet, 1561 (Bayerische Staatsbibliothek Gall sp 47 m)。
- 22) The universal short title catalogueによると1532年 du Pré 版 *La Fleur des Antiquitez* には USTC12680と USTC53652の二点がある。USTC12680はバイエルン州立図書館に三点 (Gall sp 47 b; Gall sp 47 a; Gall sp 47) 現存するとしているが、これらはいずれも1532年 du Pré 版ではない。USTC53652は七点の版本が分かっているが、この中で、例えばバイエルン州立図書館所蔵の一点 (これが Gall sp 47 a である) とパリ市歴史図書館所蔵の三点 (Res 913484, Res 550762, Res 550763) を比較してみると興味深いことがわかる。これら四点は、表紙の綴り字間違い («grant» とすべきところを «gant») とページ番号の飛ばし (ページ番号8) と打ち間違い (ページ番号を «2» とすべきところを «8») があって、ここから USTC53652は印刷の途中で訂正された版本であることが分かる。訂正が自然に行われたのであるなら、Res 550762 («gant», ページ8の飛ばしと打ち間違い) → Res 550763 («gant», ページ8の飛ばし) → Gall sp 47 a (ページ8両面が白紙) あるいは Res 913484 (ページ8の飛ばし) の順で印刷されたと考えられる。Moreau は Etat A として Res 550762, Etat B として 2 ex. (おそらく Res 913484と Res 550763)、そして、L'un ou l'autre état があるとしている (*Inventaire chronologique des éditions parisiennes du XVIe siècle d'après les manuscrits de Philippe Renouard*, t. IV, rédigé par B. Moreau, F. Paillart, 1992, p. 150)。なお、1532年 du Pré 版の表紙は「1532年」となっており、奥付 colophon には印刷年月日は入っていない

いが、後述するように本文の内容から実際に出版されたのは1533年となる。本論での1532年 du Pré 版は Gall sp 47 a を使用する。

- 23) 1532年初版と同じ Denis Janot から出ているが、この1534年版は1532年 du Pré 版と同じテキストで加筆修正はない。変更は «noms des rues» の配列レイアウトが調整され (21行の1532年 du Pré 版に合わせるため、20行の1534年 Denis Janot 版では一行のみ二段として二十行に押し込んだところがある)、また乱丁 (f. 64から f. 65にかけて) が見られることである。
- 24) Gilles Corrozet の書誌については S.-P. Michel-Bouchereaux, «Recherches bibliographiques sur Gilles Corrozet», In *Bulletin du Bibliophile*, 1948, pp. 134-151, pp. 204-220, pp. 291-301, pp. 324-336, pp. 393-411, pp. 470-478, pp. 532-538, pp. 584-596; 1949, pp. 35-47, pp. 93-107, pp. 147-154, pp. 196-202; 1954, pp. 260-295; 1955, pp. 20-21, pp. 22-27, pp. 28-41, pp. 42-48 (*La Fleur des Antiquitez* の書誌は1948, pp. 536-538, pp. 584-592) が網羅的であるが書誌としてはやや古い。
- 25) この拡大版「通り名リスト」は正確には La table du quartier de la cite de la ville de Paris pour scavoir trouver les noms des eglises & chapelles, les noms des rues & ruelles de ladicte Cite, avec leurs aboutissants tant dung coste que dautre marquees chascun a son fueillet. で始まる (*La Fleur des Antiquitez, singularitez & excellences de la Noble ville, Cite & Universite de Paris*, Pierre Sergent, 1543, f. 34 r<sup>o</sup> (Gall sp 47 d))。タイトルが示すように、この拡大版「通り名リスト」の目的は「教会、聖堂、通りの名を見つける」ことにある。なお、1543年 Sergent 版の表紙には Gilles Corrozet の名前はない。
- 26) Corrozet が「初版」として自ら出版した1550年版にも生前最後の1561年「第二版」にもこの拡大版「通り名リスト」は採用されていない。また、例えば1532年 du Pré 版の「通り名リスト」では Pellican 通りとされていた通りが1543年版では Poil de con 通りに代えられている。これらのことから1543年版は Corrozet が上梓したものではないように思われる。Dumolin も1535年から書籍業も営んでいた Corrozet が1543年版を自ら再版しないのは不自然だから1543年版は Corrozet の手によるものではないとしている (M. Dumolin, *op.cit.*, p. 220)。しかしである。1543年 Sergent 版では全体の半分を占めるこの拡大版「通り名リスト」をみすみすやり過すことは後述するテキストの「流用者」compilateur の Corrozet にはあり得ないのではないだろうか。確かに通りの始点と終点が入っていないものの、通りの配列は1543年 Sergent 版と1550年の「初版」で極めて近い。また、そもそも Corrozet がテキスト「流用者」であるなら、通りの名称が異なっていたとしても違和感なくそのリストを再利用することもあり得るだろう。加えて、Pierre Sergent の娘はやがて Jean Bonfons に嫁ぎ、その息子 Nicolas Bonfons は Corrozet の娘を妻に取って、Corrozet のパリ案内書のいわば決定版 *Les antiquitez, histoires, croniques et singularitez de la grande et excellente cité de Paris* を1576年に出版する。つまり Pierre Sergent は Corrozet に極めて近い出版書籍商なのである。そう考えれば、Corrozet が1543年 Pierre Sergent 版の「通り名リスト」から始点と終点を外して再利用したのかもしれない。いずれにしてもこの1543年 Sergent 版については別の機会に論じる。
- 27) 1532年 Janot 版と1532年 du Pré 版の異同については、P. Lacroix, *La Fleur des Antiquitez de la noble et triumpante ville et cité de Paris par Gilles Corrozet (1532)*, publiée par le Bibliophile

- Jacob, Willem, 1874の Variantes de la première édition de *La Fleur des Antiquitez de Paris* (pp. 153-164) も参考にした。
- 28) 1532年 Janot 版は写真1の1867年版 *Paris-Diamant* より更に一回り小さい。
- 29) «Je descripray sans nulle fiction / Son origine & sa fondation / En alleguant les opinions toutes / Des orateurs pour mieulx oster / les doubttes» (G. Corrozet, *La Fleur des Antiquitez, Singularitez et excellence de la plusque noble et triumpante ville et cite de Paris*, Denis Janot, 1532, f. Aiii r<sup>o</sup> (BnF Rés. LK7 5982)). 以下、引用する場合を除いて出典箇所のみを本文に明記する。
- 30) «aymer & honorer le lieu & la place en laquelle il a prise sa premiere naissance», *Ibid.*, f. Aiiii r<sup>o</sup>.
- 31) G. Corrozet, *La Fleur des Antiquitez, Singularitez et excellence de la noble et triumpante ville et cite de Paris*, Gaillot du Pré, 1532, p. 14 v<sup>o</sup> (Gall sp 47 a).
- 32) この『フランス年代記』«les Croniques de France»はその後の記述 (f. 12 r<sup>o</sup>) から Nicole Gilles の *Annales et chroniques de France* を指すものと思われる。
- 33) 途中、1532年 Janot 版にあった Ville Juive の話 (f. 14 r<sup>o</sup>) が1532年 du Pré 版では Charenton の攻防 (p. 18 v<sup>o</sup>) に変わり、ラビエヌスが軍勢を三分して攻撃すること、カムロゲヌスが麾下の者たちを激励したこと、そしてパリの橋が破壊されて火が放たれたことが『ガリア戦記』に沿って追記される。
- 34) この「イボール」Ybros は、紀元前830年に「リュテース」Luthesse を築いた「イボール」Ybros とは別人物と解釈しなければいけないだろう。Corrozet は、この「イボール」が「リュテース」で統治を始めるのは紀元後318年としているのだから。事実、Jean d'Outremeuse はその『歴史の鑑』*Ly Myreur des Histors* の中で多くの Ybros を登場させている (*Ly Myreur des Histors, chronique de Jean des Preis dit d'Outremeuse*, publiée par Ad. Borgnet, t. I, M. Hayez, 1864, p. 45, p. 50, p. 99, p. 213 et passim)。
- 35) C. Beaune, *Naissance de la nation France*, Gallimard, 1985, pp. 15-16. 以下の記述にもこれを参考にした。
- 36) *Œuvres de Rigord et de Guillaume Le Breton, historiens de Philippe-Auguste*, par H. François Delaborde, t. I, Renouard, 1882, pp. 54-55. *Collection des mémoires relatifs à l'histoire de France, Vie de Philippe-Auguste, par Rigord*, par M. Guizot, J.-L.-J. Brière, 1825, pp. 47-48 も参照した。
- 37) *Œuvres de Rigord et de Guillaume Le Breton, historiens de Philippe-Auguste*, p. 58.
- 38) パリ史に詳しい M. Barroux が Rigord のフランクス伝説のその後の年代記での変遷を辿っている。Barroux によると、Paris 自身がパリを紀元前十二世紀に作ったとした Werner Rolevink の『時の束』*Fasciculus temporum* (十四世紀末) と鳩のメッセージからパリの名が決まったとする Jean d'Outremeuse の *Ly Myreur des Histors* を除けば、本論で後述する Raoul de Presles を含めて十五世紀まで、いずれの年代記もフランクス伝説の枠組は Rigord の記述から大きく離れてはいない (M. Barroux, «Les Origines légendaires de Paris», In *Mémoires de la Société historique et archéologique de Paris et de l'Ile-de-France*, t. 7, 1955, pp. 7-40)。
- 39) C. Beaune, *op.cit.*, p. 29.
- 40) *Œuvres de Jean Lemaire de Belges*, publiées par J. Stecher, t. I, Les Illustrations de Gaule et

singularitez de Troye, premier livre, J. Lefever, 1882, p. 27. 以下引用を除いて該当章数のみを本文に記す。

- 41) «duquel porte le nom iusques aujoudhuy, la tresnoble cité Royale, assise sur le fleuve de Seine» (*Ibid.*, pp. 105-106).
- 42) この長大な「パリとオイノネの物語」の挿入には違和感を感じる。高橋薫はこの違和感を「ブルゴーニュの宮廷で流行していた欧州人のトロイア起源説を聖書系の神話と抵触しないように、そしてまたできれば学者ならぬ宮廷人（その代表が公妃・王妃だ）の興味を失わぬ形であらわすことであり、当時からマクシミリアンやルイがひとつの固定観念として有していた東方遠征の根拠を、欧州世界に普遍的に見られたトルコへの危機意識や聖地回復願望に加えて新たに立証することであった」と説明した（高橋薫『言葉の現場へ フランス十六世紀における知の中層』中央大学出版部、2007、p. 262）。
- 43) 批判者の代表としては Etienne Pasquier, Henri Lancelot Voisin de La Popelinière らである。これについても高橋薫が『歴史の可能性に向けて フランス宗教戦争期における歴史記述の問題』水声社、2009年の中で、Pasquier が、フランク族はトロイアの出自であるとする古代作家はいないと「フランクス伝説」を批判し、叙述する国への恩恵を施そうとする歴史家の心理まで分析していること（p. 299）、La Popelinière については「フランクス伝説」には証人や証言がないし、そもそも落城するトロイアから脱出することなど不可能であろうと伝承の不自然さを「もっともらしさ」で批判しているとする（pp. 300-305）。
- 44) 阿河雄二郎「近世フランスの歴史記述—フランス「国民」の起源問題を中心に—」（『関西学院史学』36、2009年、p. 70）も同様に、十六世紀後半の「考証研究」によって「フランクス伝説」は批判されていくとして、Pasquier と La Popelinière の他に、Hotman（フランク人の源流はゲルマン人）、Bodin（フランク人はケルト文化をも継承したゲルマン人）、Du Tillet（フランク人はゲルマン人に由来）による否定論を紹介している。
- 45) 厳密に言えばその前の「第四の意見」、Hugues de Saint Victor の見解を紹介する文章で、Raoul de Presles の名は挙げていないものの、既に彼の文章が書き写されている（f. 9 r<sup>o</sup>- f. 11 r<sup>o</sup>; Description de la ville de Paris sous Charles V, par Raoul de Presles, traduction de la Cité de Dieu, Livre V, chapitre XXV, Dans *Paris et ses historiens aux XIV<sup>e</sup> et XV<sup>e</sup> siècle*, pp. 103-104）。
- 46) Raoul de Presles 訳アウグスティヌス『神の国』は Gilles Corrozet にも馴染みの Jean Savetier の父 Nicolas や Gaillot du Pré が1531年に何度も出版しており（A. Pettegree et autres, *French Vernacular Books*, t. 1, Brill, 2007, p. 65）、Corrozet も容易に手に取ることができたであろう。
- 47) «Le marche des bestes estoit par deca la ou est a present la rue aux Bourdonnois au lieu que lon dit le siege aux deschargeurs, & en cores ce lieu est appelle la vieil le place aux pourceaulx.» (f. 17 r<sup>o</sup> -f. 18 v<sup>o</sup>); «Le marchié des bestes estoit par dessa la rue aus Bourdonnoys, ou lieu que len dit le siege au deschargeur ; et encores lappelle len la viez place aus poursiaux» (p. 108). 「ブルドネ通り」は現存しており、「ブルソー」市場は現在のデシャルジャー通り rue des Déchargeurs の辺りにあった。
- 48) «qui est au lieu quon dit maintenant lhostel de Clugny» (f. 17 r<sup>o</sup>).

- 49) Liaroutzos は「現在の視点」という表現は用いていないが、Corrozet は、同じくパリをほぼ半過去形の「過去の状態」で記述した Guillebert de Mets と違って、暗に読み手に披見を促す記述 (discours injonctif) になっており、まさにそれが「パリ案内書」たる所以であるとする (C. Liaroutzos, *op.cit.*, p. 44)。
- 50) «florissoit a Paris le prince des poetes francois nome Iehan de Mehim qui composa le Rommant de la Roze.» (p. 43 r<sup>o</sup>)
- 51) «Lan mil quatre cens & treze en la grant esglise nostre dame de Paris fut ediffie le grant & excellent ymage de saint Christoffe par aucun chevalier comme il appert enladicte esglise.» (p. 45 v<sup>o</sup>)
- 52) «Lesquelles deux chappelles estoffees dor & dazur a ymaiges enlevee, sont estimees de beaulte treseexcellentes.» (p. 49 v<sup>o</sup>)
- 53) «La quel fut jadis ediffiee en lhonneur des apostre Saint Pierre & Saint Pol. Et y est enterre le premier Roy de France chrestien nomme Clovis» (p. 62 r<sup>o</sup> - v<sup>o</sup>).
- 54) «le roy saint Loys fonda en lhonneur de Saint Remy» (p. 63 v<sup>o</sup>).
- 55) D. Milo によると中世の通り名は「自然発生的で有機的なシステム」système spontané, organique によって作られた。その場所に関係せず、国史に関わる名称を通りに用いる考えが現れたのは、1600年のシュリー公爵によってである。実際には十八世紀になって同時代人を讃えるために命名され、オデオン劇場前に広場ができた際、その周辺の通りにコルネイユ、ラシーヌなどの名が付けられた (D. Milo, «Le nom des rues», In *Les Lieux de mémoire*, t. 2 sous la direction de P. Nora, Quarto Gallimard, 1997, pp. 1891-1892, p. 1913)。
- 56) この他にも、ある夫婦がパリに来て、夫が妻を見失い、妻を探し歩きながらパリの街の通りの名を挙げていく「パリの通りの詩句」Les rues de Paris en vers (H. Gérard, *Paris sous Philippe-le-Bel*, Appendice Les rues de Paris en vers, Imprimerie de Crapelet, 1837, pp. 567-579)がある。
- 57) BnF : RES 4-LK7-5980, RES-LK7-26879, RES-LK7-26878, RES-YE-1434; BHVP : 8-RES-0374. また、Bonnardot も十五世紀末の版本を翻刻している (*Les rues & églises de Paris*, par A. Bonnardot, Willem, 1876)。
- 58) しかし、疑問がない訳ではない。この版本 RES-LK7-26878には通り、教会、学寮のリストとともに、パリの一日と年間の食料消費量、ヴァンセンヌの森の塔、ノートルダム大聖堂の紹介なども入っている。この版本を「流用」したのなら、パリ案内に相応しいはずのこれらの情報をなぜ記載しなかったのかという疑問が浮かぶ。
- 59) 平手友彦、前掲論文、p. 60参照。
- 60) 『古代の華』では「この街は十一の門で閉じられている」(f. 53 r<sup>o</sup>; p. 52 v<sup>o</sup>) が、「バーゼルの地図」では「十四の門」となっており、地図の作成時の現実に合わせて修正されたことが推測できる。
- 61) 本論を執筆するにあたっては、中央大学名誉教授の高橋薫氏から Histoire Générale de Paris 叢書をはじめ数々の貴重な文献とともに多くの励ましを頂戴した。この場を借りてお礼を申し上げる。

## *La Fleur des Antiquitez de Paris* de Gilles Corrozet — Comment faire un guide de Paris au 16<sup>e</sup> siècle —

HIRATE Tomohiko

Les guides-Joannes ont changé, et ont été souvent augmentés, selon les besoins de l'époque. *Paris illustré* de 1855 évoque tout d'abord l'origine de Paris et son nom. Par contre, le *Guide parisien* de 1863 commence par la situation et le climat de Paris, tandis que dans *Paris-Diamant* de 1867, la priorité est donnée aux descriptifs de l'introduction «Arrivée à Paris» par souci de praticité et d'objectivité et ce guide se conclut sur des pages consacrées au «Champ de Mars et le palais de l'Exposition universelle de 1867».

L'origine de ce genre de guide de Paris, ce serait *La Fleur des Antiquitez de Paris* (Denis Janot 1532) de Gilles Corrozet, poète et imprimeur-libraire de Paris. Cet ancien guide se compose de cinq parties : Salutation de Corrozet, Prologue, Fondation et antiquité de la Ville et Cite de Paris, Louanges de Paris de Corrozet, et Généalogies du noble Francus fils du preux Hector de Troye. Le motif de ce guide que Corrozet exprime dans la Salutation et au Prologue, c'est son «amour patrialle» pour la ville de Paris où il est né en 1510. Corrozet, jeune et poussé par «amour patrialle», présente quatre «opinions» sur l'origine de Paris et son nom : «Paris» est le nom du fils de Romus qui est un descendant de «Japhet»; Hercule a construit la ville dans une île sur la Seine dont les habitants s'appellent «Parisiens», mot dérivé de «Parrasia»; «Parisis» vient de «par Ysis» qui veut dire que la ville de Melun croyait en «Ysis» comme Saint-Germain-des-Prés de Paris et les deux villes sont proches; Paris a été pris de «Paris Alexandre» fils de Priamos de Troye. Chacune de ces quatre «opinions» sont influencées par la légende de Francus et *Illustrations de Gaule et Singularité de Troie* de Jean Lemaire de Belges.

Fondation et antiquité de la Ville et Cite de Paris se subdivise en deux sections. La première qui couvre jusqu'au martyr de Saint Denis est une reproduction souvent fidèle de la traduction française de Raoul de Presles de *La Cité de Dieu* d'Augustin (V-25). La seconde est l'histoire des rois de France qui accompagnent leurs bâtiments dans la ville de Paris dont Corrozet a recueilli les origines de nom et d'histoire dans les «anciennes Cronicques». Et Corrozet a inséré dans l'édition de Gaillot du Pré de 1532 une liste de rues de Paris qui restait depuis longtemps avec des autres éditions de ce genre des listes.

On peut donc considérer le corps de ce guide de Paris comme une œuvre de «compilations» de Corrozet. Mais, la comparaison des deux éditions de Denis Janot et de Gaillot du Pré révèle que l'auteur a également introduit de nouvelles informations qu'il avait glanées sur sa Paris contemporaine. En ce sens, on peut dire que *La Fleur des Antiquitez de Paris* de Gilles Corrozet est un guide qui nous rappelle les guides-Joannes au 19<sup>e</sup> siècle.